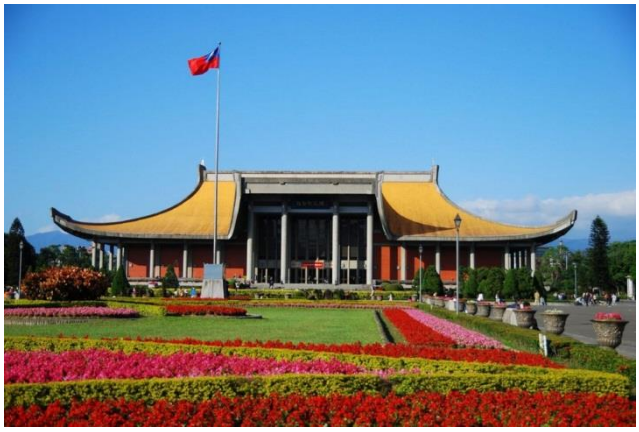
孫文（1866-1925）と日本・神戸

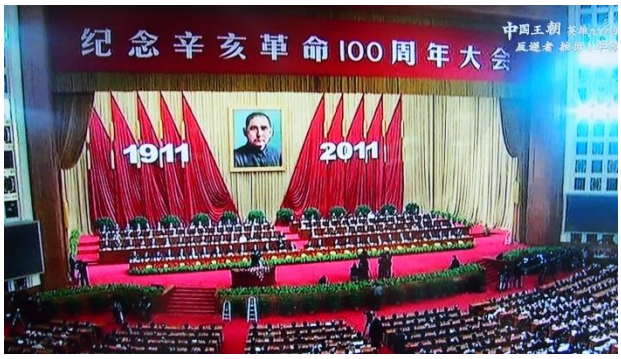
橘　雄三

はじめに

・中華民国（台湾）/「国父」　国父紀念館



・中華人民共和国 /「中国民主革命的偉大先行者」



１．孫中山記念館発行『まんが孫文物語』

■補足

第１頁

広東省香山県翠亨（すいこう）村に生まれる。

洪秀全が創始した太平天国（1851-64）の鎮圧直後。

「洪秀全第二世」と自称。『太平天国戦史』(1902)

１８歳の時、香港でキリスト教の洗礼を受ける。

第３頁

三民主義：「民族主義」「民権主義」「民生主義」

四大綱領：「駆除韃虜」「恢復中華」「創立民国」「平均地権」

辛亥革命武昌起義紀念館前の「孫中山先生之像」

1911.10.10　湖北省武昌の新軍が蜂起。次々、十四省が独立宣言。（辛亥革命）

武昌の新軍には革命派の浸透が進んでいたが、華南革命路線をとる孫文の指導下にはなかった。また、独立諸省のなかには、都督府（軍政府）の実権が革命派ではなく、清朝から離反した在地有力者や、形勢を観望した旧官僚・軍人などに帰した例が多かった。

1912.1.1　中華民国成立：首都 南京　孫文臨時大総統

「三序」構想：「軍政」「訓政」「憲政」の孫文⇔一気に議会制民主主義に進もうとする宋教仁

1912.3～1916.6　袁世凱■臨時大総統、大総統、皇帝

第４頁

孫文夫人　　※盧慕貞（ろ・ぼてい）、陳粹芬（ちん・すいふん）、宋慶齢

２．袁世凱後の中華民国政局

十二年にわたる北京政府軍閥時代

1916.7-17.7　　黎元洪（大総統）

1917.8-18.10　　馮国璋（大総統）

1918.10-22.6　　徐世昌（大総統）

1922.6-23.6　　黎元洪（大総統）

1923.10-24.11　曹錕（大総統）

1924.10　馮玉祥、クーデターをおこし、北京を掌握。溥儀、紫禁城退去

1924.11-26.4　段祺瑞（臨時執政）

1927.6-28.6　　張作霖（大元帥）

地方には地方で、多くの大小軍閥が割拠していた。各省に派遣された都督（督軍）も軍閥そのものであった。また、各地を自己の王国のごとく支配していた在地軍閥のなかには、省議会と一緒になって、中央政府が派遣した軍閥を追い払う場合もあった。

1917　孫文、広州で中華民国軍政府海陸軍大元帥就任

1919　『孫文学説』出版。上海で中国国民党結成

1920　中国共産党結成。孫文、広州で軍政府継続宣言

1921　広州で中華民国大総統就任。北伐開始

1923　上海で「孫文＝(ソ連代表)ヨッフェ共同声明　連ソ・容共・扶助工農を確認。

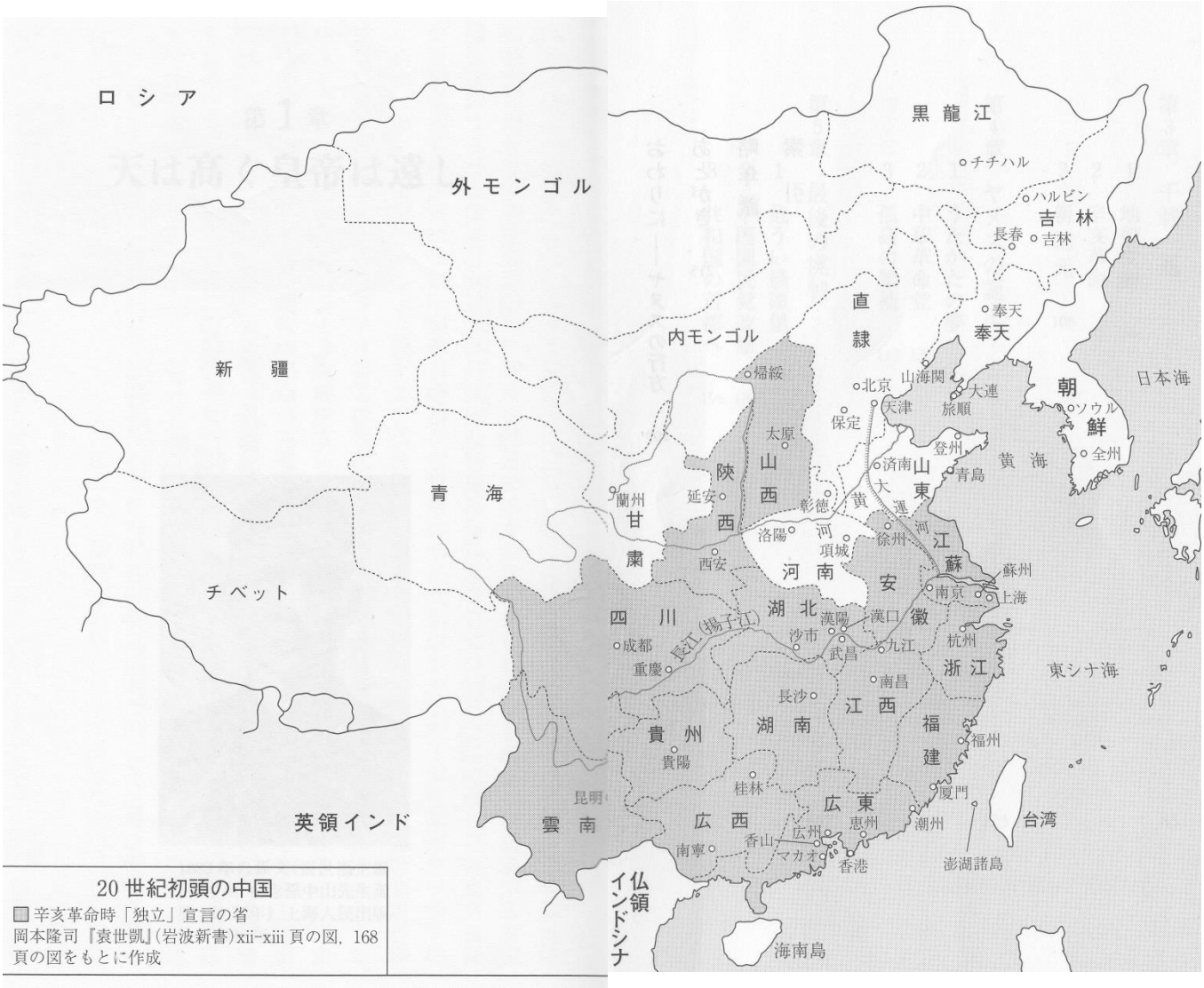
1924　広州で中国国民党第１回全国代表大会開催、国共合作を決定(-27.8)。黄埔で陸軍軍官学校設立

1924. 12　孫文入京（1925.3.12 死去）

1928.6　　国民革命軍 蒋介石北京入城

■日中戦争へ　　1931.9.18 柳条湖事件　　1937.7.7 盧溝橋事件　　12.13 南京占領

３．辛亥革命時「独立」宣言の省



20 世紀初頭の中国

■辛亥革命時「独立」宣言の省

岡本隆司『袁世凱』(岩波新書)xii-xiii 頁の図，168 頁の図をもとに作成

４．孫文と日本

孫文は、革命運動に奔走した 30 年のうち、通算、およそ９年間も日本に滞在し、活動した。

孫文を支えた日本人（☆印は 1929 年 6 月、於南京の奉安大典に出席）

⑴宮崎滔天（1871-1922　みやざき・とうてん　本名は虎蔵　熊本）☆長男龍介

1897 年、横浜で孫文と出会う。生涯、孫文ら中国の革命家を支援し続けた。自伝『三十三年之夢』（1902 年、新聞連載。のち、中国語に抄訳された）。浪曲師桃中軒牛右衛門。

⑵梅屋庄吉（1869-1934　うめや・しょうきち　長崎）☆

1895 年、孫文と初識以来、財政面の支援を続けた。孫文没後、銅像４基を中国へ贈った。

⑶萱野長知（1873-1947　かやの・ながとも　高知）☆

生涯、孫文の革命運動を支援。孫文の臨終に立ち会った。『中華民国革命秘笈』刊行

⑷山田良政（1868-1900　やまだ・よしまさ　青森）

1900 年の恵州蜂起において犠牲となる。中国革命における最初の外国人犠牲者。☆兄純三郎

⑸犬養毅（1855-1932　いぬかい・つよし　岡山）☆

1897 年、宮崎滔天らの紹介により孫文を識り、その後、孫文の革命を支援。

⑹頭山満（1855-1944　とうやま・みつる　福岡）☆

1898 年、宮崎滔天を通じて、孫文を識り、玄洋社の長老として孫文を支援する。1911 年、辛亥革命が勃発すると、革命派を支援するように日本政府に働きかけるとともに、犬養と中国へ渡り、孫文と会見、長年の苦労をねぎらった。1913 年８月、孫文亡命時、犬養毅とともに、政府を説得、容認させた。

谷中全生庵山田良政君碑(1913 建立)

⑺渋沢栄一（1840-1931　しぶさわ・えいいち　埼玉）☆

1913 年２月 21 日、東京で、孫文歓迎会開催。３月３日、孫文と中国興業株式会社設立について協議。８月、同社創設に際し、相談役に就任。

⑻南方熊楠（1867-1941　みなかた・くまぐす　和歌山）

民俗学者・博物学者。特に粘菌の研究は有名。1897 年、大英博物館で孫文と出会う。1901 年、孫文は和歌山の熊楠を訪問。

⑼浅田ハル（1883-1905?　あさだ・はる　静岡）→ 資料参照

⑽大月薫（1887-1967　おおつき・かおる　東京）

1898 年、横浜の華僑宅で孫文と出会う。1902 年、婚約。

1906 年、冨美子を出産（孫文の名にあやかって命名）。

大月薫さん

孫文と熊楠の再会(1901 和歌山)

孫文、滔天の生家訪問(1913 熊本県荒尾)

５．孫文と神戸

前後１８回、来神

特に、1913 年３月/中国政府代表としての唯一の来日

1913 年８月/第二革命に敗れ亡命

1924 年 11 月/「大アジア主義」講演。翌年３月死去

孫文を支えた神戸人（★は 1924 年、孫文来神時、孫文を訪問）

⑴三上豊夷（1863-1942　みかみ・とよつね　福井）★☆

海運業者。1906 年、萱野長知を通じて孫文を識る。1907 年、孫文の依頼で幸運丸をチャーターし、武器弾薬を積んで広東省に至るも、連絡不備で失敗。1912 年１月、ハドソン丸を提供して、革命派兵士を広州から南京へ運ぶ。1913 年８月、孫文の神戸上陸を支援。

⑵呉錦堂（1855-1926　ご・きんどう　浙江省）

1913 年３月、松海別荘で孫文歓迎午餐会主催。国民党神戸交通部々長

⑶王敬祥（1871-1922　おう・けいしょう　福建省金門島）

⑷瀧川辨三（1851-1925　たきがわ・べんぞう　山口）

神戸マッチ産業の代表の一人。1913 年３月、孫文来神歓迎会の中心人物の一人。

⑸瀧川儀作（1874-1963　たきがわ・ぎさく　奈良）★

辨三の娘婿。1924 年、孫文来神時の神戸商業会議所会頭。「大アジア主義」講演会を主催。

⑹松方幸次郎（1866-1950　まつかた・こうじろう　鹿児島）★

川崎造船所社長。1913 年８月、服部知事と協議して、三上豊夷とともに、孫文を密かに神戸川崎造船所から上陸させ、諏訪山の常盤花壇別荘に匿った。

1913.3.13 神阪中華会館での孫文歓迎会

「孫文先生諏訪山潜居の地」銘板設置(2013)

会場となった県立神戸高等女学校

1924.11.28 孫文の「大アジア主義」講演

６．落穂ひろい

(1) 横山宏章『孫文と陳独秀』（平凡社新書 2017）に見る孫文評価

p.64

宋教仁は次のように記録している。

逸仙は［青天白日旗に］固執して態度を改めず、不遜な言葉を吐いた。慶午［黄興］は怒って退席した。（中略）［孫文は］平素から、人に対して胸襟を開かず、誠実誠意・虚心坦懐に接することがなく、態度は専制跋扈に近く、人に堪え難い思いを与える。

孫文の振舞いは、他者に対する寛容さを失った傲慢と映ったのであろう。

p.99-101

いつもナンバーワンは孫文であり、ナンバーツーが黄興であった。しかし孫文は外国から指示を出し、中国で闘うのは黄興であった。それにもかかわらず、黄興の評価が低すぎる。それは後の国民党評価がそうさせた。『黄興集』二巻を編集した劉泱泱（りゅう・ようよう）の「前言」によれば、「揚孫抑黄」の流れが確定し。それは「不公平」だという。劉泱泱の孫文評価は厳しい。

「［孫文は］１８９５年１０月の広州起義に失敗した後、海外に逃亡した。それから１９１１年１０月武昌起義の勝利まで１６年間、帰国したのはたった２回で、それも滞在日数は合計９日に過ぎない。最初は１９００年８月上海に来て自立軍起義を画策したが、４日いただけである。次は１９０７年１２月、黄興と一緒にヴェトナムから鎮南関に入り、鎮南関起義を指揮した。いたのは５日だけである。この十六年間、まさに辛亥革命の醸成、発動、高潮、そして成功に至る十六年間の全過程において、孫中山の歴史における偉大さは限られている」

確かに劉泱泱の見方は正論である。だが現実の政治世界では、孫文のカリスマ性が黄興を凌駕していた。自己顕示欲が強かった孫文に対し、二人を比較すれば黄興の方が謙虚であった。決定的な違いは、孫文はオリジナルな革命思想を創案し、革命を思想的にもリードしていったが、軍事に功績があったとしても黄興にはそうした理論的魅力は欠けていた。この差は大きかった。

（中略）［孫文は］ある意味、辛亥革命では何もしなかったにもかかわらず、その果実だけを得たのである。だが、果実は甘くはなかった。

(2) 「呉錦堂を語る会通信」■孫文記念館のウエブサイトで閲覧できます

第８号　「松海別荘での孫文先生歓迎午餐会から百周年を記念する集い」開催

第 17 号　孫穂芳（そん・すいほう）女史寄贈孫文銅像除幕式挙行される

第 18 号　呉錦堂は孫文と宋慶齢との結婚式・披露宴に出席したか？

第 31 号　呉錦堂、移情閣、孫文が登場する陳舜臣著『囚人の斧』　孫文と呉錦堂の関係

第 32 号　呉錦堂は「表には名前を出さず」、孫文を支援していた

(3) 参考図書ほか

①孫中山記念館発行『まんが孫文物語』

②横山宏章『素顔の孫文－国父になった大ぼら吹き－』2014 岩波書店

③横山宏章『孫文と陳独秀』2017 平凡社新書

④深町英夫『孫文』2016 岩波新書

⑤『オープン・リサーチ・センター年報 2009 年度版』安井三吉講演「孫文と神戸」抜刷
愛知大学東亜同文書院大学記念センター

⑥小坂文乃（梅屋庄吉の曾孫）『革命をプロデュースした日本人』2009 講談社